

社会は 単純に進歩するわけではない

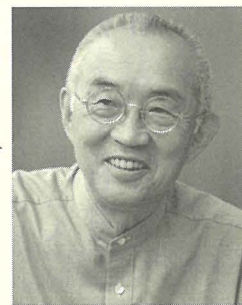
東京大学名誉教授
つきおよしお
月尾嘉男

進歩のもたらす膨大な無駄

インターネットの利用者数は世界全体で二〇億人に接近しつつある。この技術が社会を進歩させたことは間違いないが、問題も発生している。現在、一日にネットワーク内部を往来している電子メールは世界で二〇〇〇億通と推定されているが、その九割は不要な迷惑メールであ

る。それらの削除のために、人々は年間五〇〇億時間以上を浪費し、その時間を貨幣価値に換算すると、世界の国民総生産額の二%、約一一〇兆円になる。

日本は世界でも有数の清潔な国家である。それを象徴するのが温水洗浄便座の普及であり、日本の家庭の七割に浸透している。その三割に相当する一〇〇〇万個の便器は出勤直



前の午前八時前後に集中して使用され、その駆動に必要な電力は日本の電力供給の三%に相当し、一〇〇万キロワットの原子力発電機五機を稼

動して発電する電力である。この代償により世界有数の清潔国家は成立している。

社会は時間とともに向上していくという進歩史観思想がある。この思想を信用して、人間は明日に期待しているといっても過言ではない。しかし、前述の二例は進歩が単純ではないことを証明している。進歩史観が成立するためには、社会が無限の環境の内部に存在しているという条件が必要である。利用できる時間と利用できる資源が無限であれば、進歩史観は破綻しないが、残念ながら時間も資源も有限である。

豊穡の背後にある矛盾

アメリカでは家庭から一日に約二キログラムの食糧が廃棄され、すべての世帯の廃棄を合計して金額に換算すると約一三〇億円になる。一方、減量目的の運動施設の利用や薬品の服用などに一日約一二〇億円が消費され、それでも肥満のために病気が発生し、一日約二六〇億円が治療に充当されている。食糧自給比率一三〇%を背景にした潤沢な食糧の供給

は進歩であるが、世界全体を見渡すと、進歩というわけにはいかない。

アメリカで一日に廃棄される食糧は約一五万トンになるが、世界で飢餓状態にある人々への食糧援助は一日三万トン程度である。それでも飢餓で死亡する人数は世界で年間一〇〇〇万人を突破している。アメリカだけを非難はできず、日本でも一日に廃棄されている食糧は五万トンである。これらの数字が明瞭に提示していることは、社会は均質かつ単純に一定方向に進化しているわけではないという事実である。

第三の視点の奪回

江戸末期から明治初期に海外から日本に到来した人々の多数が、当時の日本を、世界に実在する数少ない極楽のような社会だと評価しているが、その一方「生活については完璧にみえる既存の構造が、西欧文明と異質な信条により破壊され、長期の不幸と革命が確実に継続していく」(S・オズボーン『日本水路紀行』一八五九)というような日本の未来予測を何人もが記録している。現在

の日本を見渡せば、あまりにも的確な予測である。

幕末になって開国し、西欧社会との格差に驚愕するあまり、日本は茫然自失の状態になり、ひたすら西欧社会を追跡することに熱中してきた。それは日本が西欧諸国の属国になることを回避できたという意味では妥当な政策であったが、一方で喪失したものも多大であった。最大の喪失は、西欧文明の根底に存在する進歩史観を信用するあまり、日本固有の伝統文化や自然環境や社会構造を弱体にしてしまったことである。

二次元平面上に生活している二匹のカタツムリが相互に出会おうとして必死で移動しても、偶然に出会う以外に機会はない。しかし、三次元空間内に生活する生物が上部から二匹の行動を観察していれば、出会う方法は一瞬にして見抜くことができ。この一五〇年、日本は西欧文明という平面の内部で右往左往してきたといっても過言ではない。再度、固有の文化という第三の視点を確保することが日本の再生に必須の条件である。